

平成二十八年四月十日発行

皇學館論叢第四十九卷第二号 抜刷

称徳・道鏡政権の実態と皇位継承

―奈良時代末期の政治混乱―

木
本
好
信

皇學館論叢 第四十九卷第二号
平成二十八年四月十日

称徳・道鏡政権の実態と皇位継承

―奈良時代末期の政治混乱―

木 本 好 信

□ 要 旨

称徳・道鏡政権の実態については、皇位継承をめぐる政変が続発し、また公卿官人とは乖離して不安定であったとする見解と、公卿官人らに支えられた安定した政権だとの理解、そして淳仁廃帝や和氣王らを排除したことから称徳女帝の専制的な政権であったとの認識など、いまだ定説をみない。しかし詳細に検討すると、皇嗣をめぐる王臣の策謀が政治的動搖の要因となり、また道鏡を寵任したのための反発から公卿らの乖離も顕著で、称徳はこれに代えて下級官人や地方豪族を擢用したがとても安定した政権であったとはいえない。このことは叙位や補任状況の検証からも裏づけられるし、異常に多い祥瑞を創出して政治的動搖を隠蔽のうえ、自らを「聖の神」として称揚しようとしたことをみても明らかである。

□ キーワード

称徳天皇・道鏡・淳仁廃帝・和氣王・氷上志計志麿・皇位継承・叙位・祥瑞

はじめに

称徳女帝と道鏡による政權については、いまだ明確な統一評価がなされていないように思われる。中川收氏が「道鏡に対する貴族・官人らの反発は、（中略）結果的に貴族・官人らを抑圧することになって政治機構の既成勢力を掌握できなかった^①」とし、また佐藤信氏が「皇位をめぐつて様々な動きが（中略）相次いで起き、政治的に不安定な状況が続いた^②」というように理解するのが通説だと思われるが、一方で瀧浪貞子氏は称徳Ⅱ道鏡による共治体制を「支えたのは、永手を筆頭とし、真備や白壁王ら貴族・皇親であった。（中略）この共治体制は、けつして孤立したのではなく、貴族官人社会のなかにその支持基盤を有していた^③」と記し、通説に反して安定政權だと主張されている。また最近になって吉川真司氏は、「藤原仲麻呂をひねりつぶした政治的実力によつて、称徳は空前の専制権力を打ちたて（中略）、〔和氣王や淳仁廃帝らの・筆者注〕不満分子の排除は順調に進んだ。（中略）天皇大権は専制君主称徳が掌握しており^④」として、「空前の専制君主^④」による政權と認識している。

瀧浪説は別にして、称徳・道鏡政權が不安定であつたとする通説に対して、称徳が専制君主であつたと相反する評価は、淳仁廃帝・和氣王・氷上志計志磨らの皇位継承をめぐる事件が起こる理由を称徳治政の不安定さに求める佐藤氏と、これらの事件を鎮圧した称徳の政治力を認める判断の相違によるものである。称徳の治政が不安定だから皇位継承をめぐる事件が続発したと理解するのも、これを鎮圧して反対の政治勢力を排除したから、天皇大権を掌握してけつして政情は不安定ではなかつたと理解するのも妥当なものであると思われる。

これらの皇位継承をめぐる事件を、称徳・道鏡政權の評価を下すに際して、どのように判断するかが難しいが、と

はいっても瀧浪氏も称徳の重祚によつての最大の課題は皇太子を立てることであつたはずであるというように、皇位継承問題は称徳・道鏡政権の評価には避けておれない問題であることは確かなことである。よつて本小論では、さらに詳細に称徳の皇位継承をめぐる事件を検討することによつて筆者なりの視点でもつて称徳・道鏡政権を再評価してみようと思う。

ただ、皇位継承のみでは相反する評価がなされていることから水掛け論に陥る危険性もあり、それを自分なりに克服する論点として叙位・補任状況を中心に官人動向を分析し、かつ孝謙女帝時代に比べても多い祥瑞に注視した結果⁽⁵⁾を再考することによつて、結論の傍証としたいと考える。先学諸賢のご叱正をお願いしたい。

一、皇位継承をめぐつて

1. 淳仁天皇の追放

天平宝字八年（七六四）十月九日、孝謙太上天皇（以降、称徳天皇と記す）は数百の兵士を率いた和氣王らを派遣して、淳仁天皇の住まいする中宮院を囲ませ、直ちに淳仁を連行、図書寮西北の地で帝位を剥奪して親王に貶めて淡路国に追放することを宣言した。淳仁は母の当麻山背らとともに藤原蔵下麻呂らによつて淡路国に衛送のうえ国府の一院に幽閉された。称徳天皇は、淳仁が六千の兵を動員したうえで、精兵でもつて押し入つて自分の殺害を図つたとの廃帝理由をあげ、かつて父帝の聖武天皇が自分への譲位時に「王を奴と成すとも、奴を王と云ふとも、汝の為むまにまに」といわれたことがあつたと正当化している。この廃帝理由についてはにわかには信じがたいし、聖武の発言についても「かく在る御命を朕また一二の豎子等と侍りて聞きたまへて在り」と、聞いていたのは自分だけでなく豎子らも聞いて

ていたとわざわざ断っていることからしても真実かどうか疑わしい。

いずれにしても、三三歳の男帝が追放されて、四七歳という若くはない独身女帝が重祚したことは、藤原仲麻呂（恵美押勝）の内乱後の動揺も影響して、政界のみならず社会的にも不安定化をもたらした。ことに佐藤氏が「政界の底流では、次の皇位継承をめぐる様々な動きが起こった」と論じたように、公卿官人らによる皇太子擁立を要因とする政治動揺が広がり、これに道鏡という例のない僧の政治的重用が拍車をかけており、称徳はこのような政治混乱の鎮静化に必死になっている。

『続日本紀』天平宝字八年十月丁丑（十四日）条には、このことを示す「人人己がひきひき此の人を立てて我が功と成さむと念ひて君の位を謀り、窃に心を通はして人をいざなひすむこと莫かれ」とみえ、称徳没後のことも考えて諸氏族による新皇太子の擁立をめぐる策謀が渦巻いていたことがわかる。

これらの動向に対して、称徳は同日条で、

諸奉侍る上中下の人等の念へらまく、「国の鎮とは皇太子を置き定めてし心を安くおだひに在り」と、常人の念ひ云へる所に在り。然るに今の間此の太子を定め賜はず在る故は、人の能けむと念ひて定むるも必ず能くしも在らず。天の授けぬを得て在る人は、受けても全く坐す物にも在らず、後に壊れぬ。

として、皇嗣について不安をもつ多くの公卿官人の早く皇太子を立てるべきだとの意見を否定している。これは皇太子を立てることによって、皇権が分裂して自身の皇権が制約されるとともに、道鏡への譲位をすでに思っていたとすれば、このことにとって不都合であったとの理由も考えられる。

しかし、このような称徳の命令によって皇位継承をめぐる騒動が収まったかという点、実はそのようなことはなく、『続日本紀』天平神護元年（七六五）三月丙申（五日）条にも、

詔して曰はく、天下の政は、君の勅に在るを、己が心のひきひき、太子を立てむと念ひて功を欲する物には在らず。然れども此の位は、天地の置き賜ひ授け賜ふ位に在り。故、是を以て、朕も天地の明らけき奇しき徴の授け賜ふ人は出でなむと念ひて在り。猶今の間は、明らかに清き心を以て、人にもいざなはず、人をもともなはずして、おのおの貞かに能く浄き心を以て奉仕れ。

とみえるように、半年後になっても一向に收拾がつかない状況になっていたことがわかる。このような権力の獲得を目的とする公卿官人たちの皇太子の擁立を図る蠢動に対して、称徳は鎮靜化に必死だったという実情を勘案すれば、吉川氏の主張される「称徳の専制」という判断には疑問を感じざるをえない。

そして、称徳をさらに焦燥させていたのが、このような諸公卿の皇太子擁立運動が、自分の皇位を脅かすことになるとの危機感ではなかったかと思う。それに対して称徳は、『統日本紀』同日条に「王臣の中に、心を執ること貞浄ならむ者は、私の家の内に兵器を貯ふべからず。その有てる所は皆官に進れ。また、伊勢・美濃・越前は是れ守関の国なり。その関国の百姓と、余国の有力の人とは、王臣の資人に宛つべからず。如し違犯すること有らば、国司・資人、同じく違勅の罪に科せむ」とみえるように、王臣らの武器所有の禁止、三関国の百姓や諸国の有力人を資人に用いることを禁止している。これは皇位継承にからんで王臣の武力による決起を恐れた措置であることは明らかであり、またそのような諸公卿の具体的な蠢動もあったものと推考することができる。

2. 和氣王の事件

そして、この称徳の危惧が現実となったのが和氣王のクーデター未遂事件であった。その概要が『統日本紀』天平神護元年八月庚申（一日）条にみえている。

從三位和氣王、謀反に坐せられて乃ち誅せらる。(中略) 復己が先靈に祈り願へる書を見るに云ひて在らく、「己が心に念ひ求むる事をし成し給ひてば、尊き靈の子孫の遠く流して在るをば京都に召し上げて臣と成さむ」と云へり。復「己が怨男女二人在り。此を殺し賜へ」と云ひてあり。(中略) 時に皇統嗣無くして、その人有らず。而して紀朝臣益女、巫鬼を以て著れて、和氣に幸せらるることを得たり。(中略) 參議從四位下近衛員外中將兼勅旨員外大輔式部大輔因幡守栗田朝臣道麻呂、兵部大輔兼美作守從四位上天津宿禰大浦、式部員外少輔從五位下石川朝臣永年等、和氣と善くして数その宅に飲む。道麻呂、時に和氣と密語す。(中略) 是に、人士、心に疑ひて、頗るその事を泄せり。(中略) 伊豆国に流す。山背国相樂郡に到りて、これを絞りて狛野に埋めり。また、益女を綴喜郡松井村に絞る。(中略) 道麻呂を飛驒員外介とす。(中略) 月を積み日を余して、並に院中にして死ぬ。(中略) 大津を日向守とし、その位封を奪ふ。從五位下石川朝臣永年を隱岐員外介とす。任に到りて数年にして自ら縊りて死ぬ。

和氣王は天武天皇の皇孫で、舍人親王の一子である御原王の息子であり、舍人の六子である淳仁廢帝の甥にあたる。この頃の有力な皇嗣としては、『続日本紀』天平宝字元年四月辛巳(四日)条に、「宗室の中、舍人・新田部の両の親王は、是れ尤も長なり」とあるように、新田部の息子塩焼王と聖武皇女の不破内親王との間に生まれた水上志計志磨・川継兄弟とともに、舍人系の和氣王も期待される存在であった。舍人系の諸王の多くは淳仁の追放とともに和氣王の叔父である船・池田王らも配流になるなどしていたから、和氣王はそれらの諸王の帰京と、何より「己が怨男女二人在り。此を殺し賜へ」とあるように、称徳と道鏡の殺害を企てて舍人系の復活を目論んだのである。

この事件について、北山茂夫氏はでっち上げたものであるとする。⁽⁸⁾ けれども、「祈り願へる書」に称徳と道鏡の殺害が記してあったというからまったくのでっち上げであるかどうか疑問である。沢野直弥氏は和氣王にその意志が

あったことは否定できないとし、中川氏は詳細な考察を加えて、軍事力を行使するようなものではないが、称徳と道鏡の呪殺を企てたものではあるとの結論を示している。^⑩

そして注目されることは、和氣王とともにこの謀略に加わっていたのが、栗田道麻呂・大津大浦・石川永年らであったことである。中川氏は和氣王を中核に結集した少数な同僚的集団であったとされるが、道麻呂は、議政官である参議に、藤原仲麻呂との闘争で勝利を決定づけた称徳の軍事基盤である近衛府の員外中将、そして称徳の意思を反映させるために創設した勅旨省の員外大輔と式部大輔という枢要職を兼官し、大浦も兵部大輔の重要職を帯任していることから、称徳の側近中の側近ともいえる者であった。それだけにこの裏切りに称徳の衝撃は大きかった。伊豆への配流と決まっていた和氣王を、平城京を出たばかりの山城国相楽郡狛野で絞殺して埋めるといふ陰惨な行動にでているのは、中川氏もいうように称徳が皇嗣問題に神経質になっていたことを示している。このような称徳のヒステリックな行動は、裏をかえせば称徳自身の皇位・皇権への固執と、そのことを危うくする動向に恐怖心すら感じるような現状にあったことが指摘される。

3. 淳仁廃帝の暗殺事件

そして、この和氣王の事件二カ月後に起きたのが称徳による淳仁廃帝の暗殺とも考えられている事件である。明らかに和氣王の事件が称徳の危機感を煽ったのであろう。『続日本紀』天平神護元年十月庚辰（二十二日）条には、

淡路公、幽憤に勝へず、垣を踰えて逃ぐ。守佐伯宿禰助、掾高屋連並木ら兵を率ゐてこれを邀る。公、還りて明くる日に院中に薨しぬ。

とみえている。一年間に及ぶ幽閉に耐えかねて逃亡しようとした淳仁を国守の佐伯助が「邀る」、つまり抑止しよう

としたとあるが、これは先帝の死の真相に関わることから『続日本紀』が用語に配慮した結果であって、その実は追撃したことで瀕死となった淳仁は翌日に没したというのが真相であろう。この間の事情には後述するような称徳による謀計があったが、それまでには紆余曲折があった。

淳仁は前年十月に淡路国に追放されているが、これまでも幾度か脱出を図っていたらしい。『続日本紀』天平神護元年二月乙亥（十四日）条には、「淡路国守従五位下佐伯宿禰助に勅したまはく、風に聞かく、『彼の国に配流せる罪人、稍く逃亡を致せり』ときく、事、如し実有らば、何を以てか奏せぬ。汝、朕が心に簡ひて、往きて彼の事の動静を監て、必ず早に奏すべし。また聞かく、『諸人等、詐りて商人と称りて、多く彼の部に向ふ。国司察らずして、遂に群を成す』ときく。今より以後、一切に禁断せよとのたまふ」とある。「稍く」とは「次第に、徐々に」との意味であり、二月以前にも、そして十月にも逃亡したのであるから幾度か逃亡を繰り返していたのである。この事実を佐伯助は報告せず、また平城京からの官人であろう淳仁のもとに群をなすくらい訪ねて来ているのを看過していることを叱責され、以後は禁断するように厳命されている。下国である淡路国司は令制では守・目のみで、置かれるはずのない掾官が置かれていたことも称徳が淡路国での淳仁の行動に留意していたことの証である。

また『続日本紀』同元年三月丙申（五日）条には、「有る人は、淡路に侍り坐す人を率て来て、さらに帝と立てて天下を治めしめむと念ひて在る人も在るらしとなも念す。（中略）何ぞ此の人を復立てむと念はむ。今より以後には如此く念ひて謀ること止めよと詔りたまふ大命を聞きたまへと宣る」ともある。二月乙亥と三月丙申両条を併考すると、淳仁のもとに来ていた多くの官人は平城京にあつて淳仁の復位を策して蠢動していた政治グループの者たちであり、復位にむかつての連絡・打合せのために淡路国に通っていたのであり、幾度か逃亡を図った淳仁はこれら官人との談合をうけて平城京か自身の安全が確保されるところへ逃亡しようとしていたものと思われる。

淳仁が廢帝とされた理由は、前述のように六千の兵士を徵發し、精兵でもって称徳を撃ち滅ぼそうとしたということで、これはもちろん捏造であったが、少なくとも廢帝にする理由としては現実味があつたのだらう。よって、淳仁が淡路国を脱出して復位のために称徳を打倒する手段として兵力の動員は考えられていたものと推考される。当時の称徳は中川・佐藤氏説のごとく公卿官人を掌握できずに政治的に不安定であつたことからして、淳仁が帰京して復位派勢力の決起が誘因となつて政情が大きく変化することの可能性は少なくなつたと推察される。

淳仁の監視を命じられていた佐伯助が淳仁に対して緩慢な態度であつたのをはじめ、淳仁復位派官人の淡路国往復を看過していた途次にあたる紀伊国司、そして佐伯助と同じように淳仁の追放当日や翌日に淳仁監視を目的に補任された摂津大夫をはじめ和泉・播磨・阿波国など淡路周辺国の国守が称徳の嚴命があつたものの、淳仁や淳仁復位派官人の動向を認識しながらも禁制を加えなかつたのは、官人の面従腹背的なものが躊躇させていたのであつて、それだけに淳仁復位派の拳兵をも想定した反攻計画が現実味をおびていたといえるのではないだらうか。^⑪

このような政情をうけて、称徳は紀伊国玉津島への行幸を計画する。この時、称徳は装束司・次第司以外にいつもの行幸ではみられない騎兵司を任じている。騎兵司は聖武天皇が天平十二年（七四〇）十月の「藤原広嗣の乱」時の東国行幸に際してとくに任じたものであつた。よって、この武威をはつての行幸は、重祚を契機に大嘗祭の一・二カ月前に行幸して玉津島の神に身の安全と皇統の安泰を祈るためのものでもあつたが、その真意は笹山晴生氏のいうとおり^⑬に紀伊・淡路両国方面の不穩な動向を制圧して淳仁に精神的な圧迫を加えることを意図としたものであつたと思う。^⑭中川氏は行幸の情報が淳仁に届いていたかどうかは疑問であり、淳仁の逃亡は嚴重に監視されている状況に耐えられなくなつたからであるとする。しかし、商人と偽つた官人が群をなすほど淡路に来ていたことを考えれば、淳仁が称徳の行幸を知らなかつたということはないし、反攻的行動が企てられていたとみるのが妥当である。

二カ月前の和氣王事件の結末をみれば、政治体制が一向に安定しないことへの焦りと、自身の皇位を危うくする皇嗣をめぐる公卿官人の動向から、称徳が異常ともいえる厳しい措置をとっても不思議ではない。直木孝次郎氏が、『続日本紀』条文の「汝、朕が心に簡ひて」とは、淳仁に対して厳しく監視せよといっているだけでなく、「朕の不安を消すために、非常の手段を取れ」という意味ともとれ、(中略) 目と鼻のさきに見える淡路に使を送って佐伯助に決断を促し」たとして、称徳による淳仁の暗殺を主張していることも、『続日本紀』天平神護元年十月甲申(二十六日)条の淳仁没死直後の「和泉国日根郡深日行宮に到りたまふ。時に西の方暗暝くして、常に異なりて風ふき雨ふる」との記事を勘案すると真実味が出てくる。

深日の西方というと、大阪湾を挟んで淡路島が間近であり、そこに暗雲がたちこめて異常な風雨があつたというのである。これは正史にみえる怨霊に関する初出記事で、憤死した淳仁の怨みを暗示するものであろう。『続日本紀』の編纂責任者であつた藤原継縄は当時三九歳、従五位下の位階にあつた。行幸に陪従していたかどうかかわからないが、その事情はよく承知していたに違いない。『続日本紀』がとくにこのような記事を載せたのには、称徳による淳仁暗殺という陰惨な事実を暗示する意図があつたのではないかと思う。⁽¹⁶⁾

称徳が、和氣王そして淳仁廃帝らによる皇位継承をめぐる騒乱を鎮圧したことによって、中川氏は「皇嗣問題は沈黙させられるという結果をもたらしした」⁽¹⁷⁾とされる。確かにこれ以降はしばらく皇嗣をめぐる騒動は起きてはいない。有力な新田部系では道祖王が橘奈良麻呂の変で、塩焼王が藤原仲麻呂の乱で、舍人系でも淳仁と和氣王が没死、船王が隱岐国、池田王が土佐国に、三島王・守部王らの子女も丹後国や伊豆国に配流となつていて有力な皇嗣は少な⁽¹⁸⁾くなつていたこともあるかもしれない。けれども皇嗣問題が基本的に解決したわけではないから、皇位継承をめぐる争いはただ奔流とはならなかっただけであつて底流はみられたのである。

4. 聖武天皇遺子事件

そのひとつの変事が、淳仁憤死の四カ月後に出来している。『続日本紀』天平神護二年四月甲寅（二十九日）条に、「一の男子有り、自ら聖武皇帝の皇子にして、石上朝臣志斐弓が生む所と称す。勘へ問ふに、果して是れ誣罔なり。詔して遠流に配したまふ」とみえるように、聖武天皇の遺子と称する男子が現れたという騒動である。勘問の結果、これを偽りと断定し、遺子は遠流に処せられている。しかし直木孝次郎氏は、遺子の母である「志斐弓」という女性はいかなるが、本当は誣罔であったのか、本当は聖武の胤であるのに、称徳・道鏡政権の安定を害するものとして、黒い霧の中にかくされたのではなからうか」と論じている。⁽¹⁹⁾直木氏が理解するように、文武天皇の後宮には紀竈門娘や石川刀子娘が入っていたこと⁽²⁰⁾から考えても、石上氏出身の志斐弓が聖武の男子をもうけていても不思議ではない。

直木氏は志斐弓のことはわからないとされるが、「志斐弓」、「シヒテ」、「弓」手」という名前の類似から、天平宝字七年正月に無位から従五位下に叙爵された後宮に仕える女官の石上糸手と姉妹である可能性が高い。また同族には左大臣石上麻呂の娘で光明皇后に仕え、藤原宇合との間に広嗣・良継を生んで天平宝字三年五月に従五位上に叙された石上国守（国盛）もいることなどを併考すると、志斐弓も姉妹であろう糸手とともに女官であって、麻呂の嫡子豊庭の娘と推察される。

豊庭は養老二年（七一八）五月に四〇歳で没しているが従四位上で、和銅七年（七一四）十一月には威儀を高めるための左將軍に大伴旅人が任じられているのに対して、豊庭は右將軍を命じられているくらいであり、前年三月の麻呂の死をうけて石上氏の氏上として、また右大臣藤原不比等の嫡子武智麻呂と同等に昇進するなど将来を嘱望される存在であった。よってその娘の志斐弓が聖武に入内して男子をもうけることは十二分に想定される。⁽²¹⁾しかし、先述してきたような称徳の皇権を脅かす有力者を凄惨なまでに排除している現状から推察して、この遺子が「称徳・道鏡政

権の安定を害するものとして、黒い霧の中にかくされたのではなからうか」との直木氏の見解は的を射たものであると思う。

いずれにしても、このような変事が起こるのも、称徳の皇権への固執から皇太子を立てずに公卿官人らの皇嗣をめぐる画策をよんでいたにほかならないからであつた。

5. 氷上志計志麿と道鏡の皇位窺竄事件

皇嗣に有力な舍人・新田部系のうち舍人系の諸王が淳仁の廃帝を契機に配流になるなどしていたのに対して、新田部系は塩焼王が藤原仲麻呂の与党として殺害されたものの、その子息たちは母が聖武末娘の不破内親王（称徳の異母妹）のこともあつて刑罰を被ることもなく、氷上朝臣氏を賜姓してはいたが聖武の皇統を引く者として有力な存在となつていた。称徳の皇権を脅かす者への猜疑心は、嫡子の氷上志計志麿に向けられたのも当然であつた。まして、道鏡への皇位継承の気持ちが必要ですに女心にあつたとすれば尚更であろう。

『続日本紀』神護景雲三年（七六九）五月壬辰（二十五日）条によると、母の不破が京外への追放、志計志麿は土佐国への遠流に処せられる事件が起こっている。その詳しい事情については、『続日本紀』同年五月丙申（二十九日）条に、

県犬養姉女ら、巫疊に坐して配流せらる。（中略）逆心を抱蔵きて己首と為りて忍坂女王・石田女王等を率ゐて、
（中略）厨真人厨女が許に窃に往きつきたなく悪しき奴どもと相結び謀りけらく、朝廷を傾け奉り、国家を乱りて、きらひ給ひてし氷上塩焼が児志計志麿を天日嗣に為むと謀りて掛けまくも畏き天皇の大御髪を盗み給はりて、きたなき佐保川の鬻體に入れて大宮の内に持ち参入り来て、厭魅為ること三度せり。

と記されている。

県犬養姉女は同族出自の県犬養広刀自の娘である不破と親しく、予てから二人の間で志計志磨の擁立を考えていたに違いない。この事件は和氣王や淳仁廢帝の場合と違って公卿官人らの参画がないのも異例で、髪を髑髏に入れて呪殺するとの手段がいかに後宮内での事件らしい。しかし、これが事実であったかという点、称徳が没した一年後の宝龜二年（七七二）八月になって誣告であったことが露呈した。『続日本紀』同月辛酉（八日）条には、「丹比宿禰乙女の位記を毀つ。初め乙女は、忍坂女王・県犬養姉女ら乗輿を厭魅すと誣告す。是に至りて姉女が罪雪む」とある。称徳の髪を入手したということであるから、姉女をはじめ忍坂女王・石田女王ら称徳側近の者たちが首謀者とされ、誣告したのも多比乙女という女官であったことを考えると、後宮内での志計志磨擁立派の女官を排除し、これを理由に有力な皇嗣である志計志磨を陥れることをでっち上げた事件であり、これを首謀したのは称徳自身であったと思われる。

この年の九月には宇佐八幡大神の「道鏡を皇位につければ天下は太平になる」という託宣をうけて、宇佐に派遣されて託宣を再び確認した和氣清麻呂が「无道の人は早に掃ひ除くべし」と奏上したことに始まる道鏡の皇位窺奪の騒動が起こっている。この事件の発端となった大宰主神の習宜阿曾麻呂が託宣を上奏したのは志計志磨の事件と前後する時期にあたっている。道鏡の皇位継承を望む勢力にとって、聖武の孫で藤原氏の血脈にも繋がる有力な皇嗣である志計志磨は邪魔な存在であったはずである。道鏡の即位が現実味を帯びてきた政治動向のなかで、その障害ともなる志計志磨を早急に排除しておく必要があったのかもしれない。⁽²²⁾

そうだとすると、道鏡の即位について称徳自身が積極的であったことの傍証となるが、何よりも『続日本紀』神護景雲三年九月己丑（二十五日）条に、「清磨、其が姉法均と甚大きに悪しく奸める忌語を作りて朕に對ひて法均い物

奏せり。此を見るに面の色形口に云ふ言猶明らかに己が作りて云ふ言を大神の御命と借りて言ふと知らしめしぬ」として、「无道の人は早に掃ひ除くべし」との道鏡排除の託宣を捏造と断定して、清麻呂を除名のうえ大隅国への配流処分にしたことは、称徳が道鏡への讓位を期待していたことにほかならない。瀧浪貞子氏は草壁皇統であることを標榜してきたから道鏡への讓位など考えるはずがなく、道鏡を断念させていたとするが、⁽²³⁾淳仁に「王を奴と成すとも、奴を王と云ふとも、汝の為むまにまに」との聖武の言葉を引いて淡路国に追放していることからすると必ずしもそうとはいえない。瀧川政次郎氏は、『続日本紀』条文を検討して、当時のものを伝える宣命と編纂時の説明とは宣命に分があり、加えて天皇を批判することのない正史の性格を考慮すると、その分必要以上に道鏡を悪者とする意図もあろうことからして、⁽²⁶⁾称徳が主体となつて道鏡を即位させようとしていたとする。⁽²⁵⁾最近でも佐藤氏は称徳が道鏡への讓位を模索した事件とし、⁽²⁶⁾勝浦令子氏も称徳が主体的に動いたとの見解を示している。⁽²⁷⁾

また、『続日本紀』同日条には、「此の事を知りて清麻呂等と相謀りけむ人在りとは知らしめて在れども、（中略）如是の状悟りて先に清麿等と同心して一つ二つの事も相謀りけむ人等は心改めて明らかに貞かに在る心を以て奉侍れと詔りたまふ御命を」とあつて、清麻呂とともに道鏡即位に反対する公卿官人が存在しており、称徳はこれらに「改心して仕える」ことを命じている。沢野氏は、道鏡への讓位は清麻呂の行動によつて阻止されたが、これは広範な貴族層の存在を称徳が意識していたからであり、皇嗣に關することは天皇の意志のみでは実行できなかったのであると⁽²⁸⁾する（よつて称徳の専制を否定されているのだらう）。

道鏡への讓位の挫折は、称徳の皇嗣についての態度をさらに頑ななものにしたらしく、翌十月乙未（一日）条には「君の位は願ひ求むるを以て得る事は甚難しと云ふ言をば皆知りて在れども、先の人は謀をぢなし、我は能くつよく謀りて必ず得てむと念ひて種々に願ひ祈れども、（中略）過を知りては必ず改めよ、能きを得ては忘るなといふ」と

厳しい口調で皇位を願う心を戒める命令を下しているが、それでも皇位継承をめぐる騒動は収まらずに公卿官人間で策謀がなされていたのである。称徳が没したその日に皇太子擁立をめぐつて白壁王を推す左大臣藤原永手・藤原良継らと、文室浄三・大市兄弟を挙げる吉備真備らとが対立したことが『日本紀略』にみえているが、これはこの時になったの突然のことではなく、称徳の制止にも拘わらずにすでに称徳存生中からみられた様相であったのである。

次々と起きる皇位継承をめぐつての政争・政変を鎮圧してきたからといって称徳が専制的であったかというところ、その内実を検討すると叙上のように疑問である。ことに道鏡即位を推進したことで称徳への公卿官人らの乖離も一層すすみ、信頼も失われる深刻な政情となった。信頼回復のために称徳は、元正天皇の「貞しく明らかに淨き心」で聖武天皇に仕え、また皇太子であった称徳にも「助け奉侍れ」るようにとの勅や、聖武の称徳への「二心無くして奉侍れ」との勅を引いて、自身の正統性を主張するとともに、公卿官人らとの関係修復に必死となっていたようである。そのひとつ同日に藤原氏と五位以上の者らに「自分の教えに違わずに、心を整え直し、束ね治めるしるし」として、端に金泥で思いやりを表わす「恕」字を書いた八尺の紫綾の帯の配ったことがあった。これは「藤原氏を特別に優遇して、反感を和らげた」ものとの見解もあるが、五位以上のすべての官人にも配布していることからしても、藤原氏をはじめとする公卿官人に自分への忠誠心を確認したものであって、その離反に苦慮していたゆえのことであった。称徳と公卿官人との関係が良好であれば、まずこのような帯を配布するというような陳腐なことは考えられなかったはずである。

6. 称徳天皇の評価

このような称徳・道鏡時代について、『続日本紀』は称徳を高野陵に葬る記事につづいて、

称徳・道鏡政権の実態と皇位継承（木本）

勝宝の際、政、儉約を称ふ。太師誅せられてより、道鏡、権を擅にし、軽しく力役を興し、務めて伽藍を繕ふ。公私に彫喪して、国用足らず。政刑日に峻しくして、殺戮妄に加へき。故に後の事を言ふ者、頗るその冤を称ふ。と、孝謙天皇時代の治政が儉約であつたのに、藤原仲麻呂の没後は道鏡が権勢を恣にして国費が不足し、また殺戮が横行したという政治の乱れがあつたとの評価を記している。瀧浪氏は道鏡との男女関係で醜聞性の風潮が強い平安時代での編纂であるから、この称徳評を鵜呑みにはできないとする⁽³¹⁾。けれども、これは『続日本紀』記事の真否の検証を意図的に避け、その要因を編纂態度に転化するものである。この『続日本紀』卷第三十は光仁朝に石川名足・上毛野大川が編修したあとに、藤原繼縄や菅野真道らが不要を削り、不足を補つて延暦十三年（七九四）八月に成つたものである。称徳朝時代に名足は四〇歳前後で大和守などを歴任、繼縄は参議に右大弁や外衛大将・越前守を兼任して政権の中枢に位置していたから、名足も繼縄も実際に経験したことであつて信頼できる。このような評価は繼縄らにとどまることではなくて、多くの公卿官人の共通する認識でもあつたと思う。

繼縄らによつてこのように評価される称徳・道鏡政権は、吉川氏のいうように称徳が天皇大権を掌握して専制君主であつたがゆえのことであるのかもしれない。また度重なる皇位継承をめぐる事件・政変について「不満分子の排除は順調に進んだ」称徳の専制による結果と理解することもできるかもしれない。

しかし、上述してきたように、称徳は天平宝字八年十月に「天の授けぬを得て在る人は、受けても全く坐す物にも在らず、後に壞れぬ。（中略）力を以て競ふべき物にも在らず」、天平神護元年三月に「己が心のひきひき、太子を立てむと念ひて功を欲する物には在らず。（中略）おのおの貞かに能く淨き心を以て奉仕れ」、神護景雲三年九月にも「清磨等と同心して一つ二つの事も相謀りけむ人等は心改めて明らかに貞かに在る心を以て奉侍れ」、そして「君の位は願ひ求むるを以て得る事は甚難しと云ふ言をば皆知りて在れども、先の人は謀をぢなし、我は能くつよく謀り

て必ず得てむと念ひて種々願ひ祈れども、(中略) 過を知りて必ず改めよ、能くを得ては忘るな」と、再三再四にわたって公卿官人の皇位継承に関わる行動を戒めている。それでも前述してきたような公卿官人の策謀はとどまることはなく、現実に藤原式家を中心とする白壁王、そして吉備真備による文室淨三の擁立運動は秘密裏に、けれども確固としてすすめられていたのである。

加えて臣下に「恕」と書いた紫綾の帯を配布して忠誠を誓わせるなどのことは、およそ天皇大権を掌握した「空前の専制君主」のなす行為ではあるまい。やはり筆者は称徳・道鏡政権について、佐藤氏の「皇位をめぐつて様々な動きが(中略) 相次いで起き、政治的に不安定な状況が続いた」のが実態であったと理解するのが妥当だと思う。

二、叙位・補任、祥瑞をめぐつて

1. 叙位・補任をめぐつて

次に冒頭でも触れたように、称徳の皇権と治政について、その実態を検証する方便として叙位・補任状況を中心に官人動向を分析し、かつ孝謙女帝時代に比べても多い祥瑞に注視してみたいと思う。ただ詳細については以前にも論じたことがあるので前稿に拠⁽³²⁾つてもらいたい。が、幾分また新たな視点からの検証も付加して論及することにする。

まず具体的に論じる前に、称徳・道鏡政権の官人動向についての先学の理解を簡潔に紹介してみる。中川氏は、権力の基盤を太政官機構のなかに打ち建てて形成したのではないことから組織的にはきわめて脆弱で、政治機構の既成勢力を掌握できなかったと判断し、尾畑光郎氏も中央貴族官人らの反発から、それに代えて新たに官僚への進出を望んでいた郡司を対象に行賞を行い、これらに拠ろうという政策がとられたと同様に理解した⁽³⁴⁾。さらに持田泰彦氏も称

徳朝下での従五位下・外従五位下への昇叙者が多いのは、下級官人層や地方豪族を取り込むためのものであったとする⁽³⁵⁾。これらのことから称徳・道鏡政権は、公卿官人とは乖離して既成の政治勢力を掌握できずに、これに代えて下級官人・地方豪族を登用しようとしていたことは確かなことであろうと思う。

【表1】叙爵者数

称 徳 朝			孝 謙 朝		
天平神護元年	73		天平勝宝元年	63	
同 2 年	43		同 2 年	11	
神護景雲元年	93		同 3 年	17	
同 2 年	27		同 4 年	9	
同 3 年	26		同 5 年	5	
同 4 年	13		同 6 年	17	
[年平均]	50		同 7 歳	4	
			同 8 歳	0	
			[年平均]	16	

そこで、このことの論証を具体的に有効とする手段として『続日本紀』の記事をもとに数値化して検証してみてみる。まず尾畑氏の指摘した従五位下・外従五位下への昇叙、つまり叙爵について『続日本紀』をみてみるが、称徳朝の叙爵の状態がどのようなものであったかを判断するために、孝謙朝の状況と比較してみる。それを纏めたのが【表1】の「叙爵者数」である。

このように孝謙朝の叙爵が年平均一六件であるのに対して、称徳朝は五〇件で三倍も多くなっている、持田氏の主張が裏づけられる。孝謙朝の天平勝宝元年（七四九）が突出して多いのは即位にともなう叙位が行われたからであり、これは天平神護元年も同様である。称徳朝が違うのは即位

以後も各年三〜五倍多いことである。神護景雲四年（七七〇）が少ないのは称徳が没した八月までであるからである。これによって六位以下の位階にあった下級官人や地方豪族を内位の五位へと昇叙させていることが実証されるが、そのことは『続日本紀』天平神護二年（七六六）十二月壬寅（二十一日）条に、因幡国の春日戸人足が錢百万、稻一万束を献上したのをうけて父の大田を従六位下から外従五位下に、神護景雲元年三月乙亥（二十六日）条に、常陸国新治郡の大領である新治子公が錢二千貫・商布一千段を献上して外従六位上から外正五位下に昇叙しているなどのことがみえていることから確認できる。

このような傾向は下級官人・地方豪族だけにとどまらず、公卿官人らへの懐柔という事由もあって全般的に昇叙が多く行われた。それが【表2】の「昇叙者数」である。

【表2】昇叙者数

称 徳 朝			孝 謙 朝		
天平神護元年	125		天平勝宝元年	115	
同 2 年	75		同 2 年	33	
神護景雲元年	126		同 3 年	35	
同 2 年	53		同 4 年	13	
同 3 年	48		同 5 年	7	
同 4 年	21		同 6 年	34	
[年平均]	81		同 7 歳	4	
			同 8 歳	2	
			[年平均]	30	

やはり叙爵だけでなく即位年の昇叙が多いのは全昇叙者についても同じであるが、年平均でも孝謙朝に比べて称徳朝は二〜三倍である。称徳朝の全昇叙者にしめる叙爵者の割合は六一％で、孝謙朝の五一％よりも多いことがわかる。ことに神護景雲元年は七三％で突出しており、後述するように瑞雲による祥瑞を契機として下級官人や地方豪族を一層登用しようとしていたことがわかる。

これは『続日本紀』宝亀元年（七七〇）八月丙午（十七日）条に、「勝宝の際、政、儉約を称ふ」というように安定していた孝謙朝の政情が、称徳朝になってその政権が前述のように公卿官人を十分に掌握できずにいたことによってその政権が前述のように公卿官人を十分に掌握できず、称徳朝の理由から自派官人の位階をすすめて主要な職官に就けることによって政権の基盤を確固としようとしたためであろう。

この昇叙者を氏別に、即位二年目の（即位年だと昇叙者が多様で特例的であろうことから全体的傾向の把握のために即位二年目とした）天平勝宝二年と天平神護二年を例にとつて、皇親・藤原・大伴・多治比・石上・粟田・平群・巨勢・大野・小野・石川氏など中央貴族と、その他の氏族（弓削・道嶋など）に区別してみると、以下のような【表3】の「氏別昇叙者数」の結果になる。

天平勝宝二年に比べて、天平神護二年は他氏族出自官人が四二％から五七％に多くなるのに対して、皇親・中央貴族出自官人は五七％から四二％へと、数字が逆転している。ことに皇親・藤原氏出自官人に限ってみると、その割合

【表3】氏別昇叙者数

天平神護二年		天平勝宝二年	
中央貴族	他氏	中央貴族	他氏
29	39	20	15
42%	57%	57%	42%
皇親・藤原	他氏	皇親・藤原	他氏
26%	73%	45%	54%

【表4】補任者数

称	徳	朝	孝	謙	朝
天平神護元年	35	天平勝宝元年	40		
同	2年	40	同	2年	12
神護景雲元年	115	同	3年	0	
同	2年	125	同	4年	15
同	3年	75	同	5年	10
同	4年	25	同	6年	50
[年平均]	75	同	7歳	1	
		同	8歳	0	
		[年平均]		16	

はさらに顕著で、四五%から二六%に激減している。天平勝宝二年は皇親・藤原氏の昇叙者が多いのに対して、天平神護二年は極端に減少していて、中央貴族以外のお氏氏族も広範囲に多氏族に及んでいることが指摘される。これは尾畑氏や持田氏の主張する中央貴族らを掌握できずに、その代わりに下級官人や郡司・地方豪族を昇叙・登用して政権を運営してゆこうとしていたことを明確に裏づけている。

要・重要職への自派閥官人を配置する必要も考量される。なぜ下級官人や地方豪族を昇叙させるかというと、それは官位相当制の原則から重要職であれば高い位階の人材が必要となるわけであることは説明するまでのこともない。

その点を考慮すれば、昇叙の結果をうけて補任の状況も分析検証する必要もあらうと思う。そこで昇叙と同様に、補任についても同様の方法で基本五件毎に作成してみるのが【表4】の「補任者数」である。これをみてみると、補任に関しても叙爵者・昇叙者とはほぼ同じような傾向であることを指摘できる。

この【表4】をみて注視されるのは、【表2】の叙位と同じように天平勝宝元年とともに神護景雲元年が最も多い。これは改元による叙位が行われたからであり、天平勝宝元年は聖武天皇の東大寺行幸と孝謙の即位にともなう昇叙で

【表5】氏別補任者数

天平神護二年		天平勝宝二年	
中央貴族	他氏	中央貴族	他氏
17	17	8	5
50%	50%	62%	38%
皇親・藤原	他氏	皇親・藤原	他氏
29%	71%	31%	38%

ある。しかし、神護景雲元年と天平勝宝元年の叙位では異なることもある。それは昇叙が補任と連動していないことである。天平勝宝元年度は例年に相違して多くの昇叙が行われているが、これにともなつての補任は多くない。けれども神護景雲元年度は昇叙者数と補任数の双方が多い。正月の定期叙位と八月の改元叙位の直後には補任を実施して、叙位と補任が連動している。翌年の同二年はさらに多い。これは論述してきたように称徳が政権を確固とするために、下級官人や地方豪族を昇叙して、これらの者を重用するために補任を行っていたことを示しているように思われる。

そして、この補任に預かった官人らを昇叙者と同じように氏族別に整理してみると、以下のような【表5】の「氏別補任者数」となる。

この【表5】をみて、天平勝宝二年は中央貴族が六二％と他氏を圧倒しているのに、天平神護二年は同件数である。また天平勝宝二年と天平神護二年の皇親と藤原氏出自官人の補任者数の割合が大差ないのに、天平神護二年度の他氏出自官人は三八％から七一％になっている。これは中核的な存在である皇親や藤原氏はどうにかその政治的立場を保持したものの、その周辺にいる大伴・多治比氏などの中央貴族の補任者が他氏の下級官人や地方豪族にとって代わられた現状を物語っている。このように補任者からみても、繰り返しになるが昇叙者の傾向と同じように称徳は中央貴族層と乖離していたことから、これに代わつて下級官人や地方豪族を重用して政権を維持しようと図っていたことが裏づけられるといつてよいと思う。

2. 祥瑞をめぐる

祥瑞とは、陰陽二気の調和不調和は為政者の徳不徳の反応とする天人相関的な帝王観を含む中国の考えにもとづくもので、東野治之氏は天皇にとって律令政治の理想たる徳化の及ぶ範囲の広がりの意味して、律令貴族を含めた為政者の施政が正当化されたとしている。⁽³⁶⁾つまり祥瑞が現れるということは、天皇の治政が理想的であり、そのことが天に感応したということで、天皇の施政正当化の方便となるのである。称徳もこのような認識をもっていた。『続日本紀』神護景雲元年（七六七）八月癸巳（十六日）条に、

今年の六月十六日の申時に東南の角に当りて甚奇しく異に麗しく雲七色相交りて立ち登りて在り。此を朕自らも見行はし、また侍る諸の人等も共に見て怪しび喜びつつ在る間に（中略）六月十七日に度会郡の等由気の宮の上に当りて五色の瑞雲起ち覆ひて在り。（中略）また陰陽寮も、七月十日に西北の角に美しく異にある雲立ちて在り。同じき月の廿三日に東南の角に有る雲本朱に末黄に稍五色を具へつと奏せり。（中略）瑞書に細に勘ふるに是れ即ち景雲に在り。實に大瑞に合へりと奏せり。然るに朕が念し行さく、如是く大きに貴く奇しく異に在る大き瑞は、聖の皇が御世に至れる徳に感でて天地の示現し賜ふ物とも常も聞し行す。

とみえていることからしても確かめることができる。六月には伊勢の豊受大神宮に瑞雲がみえ、平城宮でも六月と七月には東南や西北の方向に慶雲（景雲）が現れたとして、「大きくかつ貴く珍しく尋常でない大いなる瑞祥は、聖人の天皇の御世に至上の徳に感応して天地があらわされるものであると、いつも聞いている」と述べて、神護景雲と改元するというのである。

このような称徳の認識を反映して、称徳朝、とくに神護景雲年間には祥瑞が多くみえる。簡潔に掲出すると、①神護景雲二年正月十日には播磨国が白鹿を、②同二年六月二十一日には、武蔵国橘樹郡の飛鳥部吉志五百国と同国久良

郡から白雉を、③同二年七月十一日には、肥後国葦北郡の刑部広瀬女と日向国宮埼郡の同伴人益が白亀と白髪・白尾の青馬を、④同二年八〔七〕トモアル月八日には参河国碧海郡の長谷部文選が白鳥を、⑤同二年十一月二日には、美作掾恩智神主広人が白鼠を、⑥同三年五月十六日には伊勢国員弁郡の猪名部文磨が白鳩を、⑦同三年十一月二十八日には伊予国守の高円広世も白鹿を、⑧同四年四月〔五月?〕までに弓削清人が白雀を、⑨同四年五月以前に伊予国員外掾の笠雄宗が白鹿を、⑩同四年七月十八日には常陸国那賀郡の丈部竜麿と占部少足が白鳥を、⑪同四年七月十八日には筑前国嘉麻郡の財部宇代が白雉を、⑫同四年八月五日には肥後国葦北郡の日奉部広主女が白亀を、⑬同四年八月十七日には肥後国益城郡の山稻主が白亀を献上するなど一六件もの祥瑞が報告されているが、その祥瑞物が白鹿、白雉、白亀、白鳥、白鼠、白鳩、白雀や白髪・白尾の馬など、(一)すべてが白色の祥瑞であり、(二)筑前、肥後、日向国など西海道の国が多く、(三)神護景雲二年正月から同四年八月までの二年八カ月に集中していることも注視される。

(一)すべてのが白色祥瑞であることは、天武天皇が壬申の乱で前漢の高祖の故事にならって軍旗に赤色を用いて勝利をえたことに因⁽³⁷⁾んで、天武天皇朝から持統天皇朝にかけて思想的に正当化して莊嚴することもあつて赤色の祥瑞が重視されたことを意識していたからである。白色は神祇信仰の清浄な心に通じる瑞色として尊重され、人神の要素を作り出すとされるが、だからといって祥瑞のすべてが白色であるということはありません、これが人為的なものであることは明確である。(二)の九州諸国に多いことも、これは大宰帥であつた道鏡の実弟である弓削浄人自らが白雀を献上していることから推察して、その職掌から西海道諸国に積極的に白色祥瑞の献上を要求していたからであろう。

また(三)神護景雲二年正月から同四年八月に集中していることについても理由があつたと思う。祥瑞進献の時期について、東野氏は養老四年(七二〇)以降はほぼ年頭に固定しており、年頭以外に献じられたものはすべて大瑞であるとしているが、前述のようにこの期間の祥瑞は①白鹿を除いて、大瑞の白亀・白鳥(③⑫⑬)、上瑞の白鹿(⑦⑨)、

【表6】各天皇朝別祥瑞回数・年平均回数

	文武	元明	元正	聖武	孝謙
回数	20	19	8	22	8
平均	2	2.3	0.9	0.8	0.9
	淳仁	称徳	光仁	桓武	
回数	0	16	19	8	
平均	0	2.6	1.8	0.3	

中瑞の白鳥⁽⁴⁾⁽¹⁰⁾・白鳩⁽⁶⁾・白雀⁽⁸⁾・白雉⁽²⁾⁽¹¹⁾もそれぞれ五月、六月、七月、八月、十一月で年頭以外の日時になされている。この事情について福原崇太郎氏は政治的な推移と関連させて考える必要があるとし、茂木直人氏は称徳を顕彰して政権の安定をねらいとしていたと考えている。⁽⁴³⁾ 加えて根本誠二氏も明解に「弓削御浄浄人など道鏡人脈による、最後のあがきかもしれない」と理解している。⁽⁴⁴⁾

つまり、この神護景雲年間の白色祥瑞は、赤色祥瑞が壬申の乱を勝ち抜いた天武天皇を専制君主として思想的に正当化・莊嚴化する役割をもっていたのにならって、称徳が祥瑞献上を積極的に要請して、その治政を天人相関の思想によって称揚しようとする目的であったものと思われる。このような祥瑞は、政治がよく治まっている場合は必要のないものであって、政情が不安定になっている時だからこそ治政を修飾して正当化する必要が生じるのである。細井浩志氏は歴代の天皇朝に比べても称徳朝の祥瑞が異常に多いことを指摘している。⁽⁴⁵⁾ 確かに【表6】の「各天皇朝別祥瑞回数・年平均回数」を一覧すればわかるように、称徳朝の祥瑞が多く、以外八代の年平均一・三回を越えて倍の二・六回である。

これは称徳が祥瑞の出現を創出することによって、中央貴族の反発を理由とする政局の動揺と不安定な政情を隠蔽して自らが治政を称揚しようとしたものであったと思われる。このような称徳の画策に呼応したのが、中川氏や榮原永遠男氏が指摘した称徳が支持勢力にしようとした掾・員外掾をはじめとする地方豪族などであった。⁽⁴⁶⁾ 祥瑞進献が大宰帥浄人の管轄下にあった西海道の筑前・肥後・日向国が半数を占め、道鏡派と思われる伊勢老人が国守であった三河国や、重用されていた藤原雄田麻呂（百川）が国守の武

蔵国などであることは、西別府元日氏が「祥瑞が現実的な課題を解消ないし隠蔽するために政治的に利用され、あるいは演出・創作された可能性のあることは、周知のことに属する」⁽⁴⁷⁾というように、この祥瑞による治政の称揚が称徳の工作によるものであることを明確に示している。

この祥瑞は、地方豪族に拠って権力基盤を構築しようとしていた称徳にとつては懐柔策であり、また地方豪族の政治的要求とも一致するものでもあつて、茂木氏が為政者はその徳をみえる形で演出する祥瑞に求め、献上する地方豪族らは褒賞をえようとする思惑があつたとするとおりである。⁽⁴⁸⁾少し降るが宝龜三年七月には上総国から前脚の二蹄が牛に似た馬が祥瑞として献上されたが、これは人為的に偽作されたことが露呈して国介の巨勢馬主ら五人が解任、馬の本主である宗我部虫麻呂が決杖八十に処せられている。⁽⁴⁹⁾これは祥瑞献上の要請とこれに応えるためには偽作をも厭わず褒賞に預かろうとする下級官人・地方豪族が存在した称徳朝の政治的風潮が光仁天皇即位後にもまだ遺存していたことを証明している。

このように称徳朝後期の祥瑞献上には、中央貴族らとの乖離を要因とする政権の動揺を、下級官人や地方豪族に代えることによって克服することを目的に、地方豪族の要求に応え懐柔する一方で、混迷する治政を隠蔽し、自らを称揚しようとする称徳の企図があつたといふことができる。

おわりに

冗漫として上述してきたが、称徳天皇は自分の皇権確立のために対抗する有力な皇嗣や政治勢力を強圧的に排除した。それが淳仁廃帝の謀殺や和氣王の伊豆国への配流途中での絞殺、そして異母妹不破内親王と氷上志計志磨母子の

追放などの政変であった。これらのことは道鏡への讓位を考えてのことだと理解することもできるが、何よりも自らの皇權確立のためのものであった。これら有力な対抗者を次々と葬り去ったという結果的事実にもとづいて称徳が専制君主化して皇權を掌握していたという理解には違和感をおぼえる。筆者の理解はこれとは相違して、佐藤氏らの主張と同じように、まず基本的には称徳の皇權掌握が不十分であったがゆえに、このような皇嗣をめぐる陰惨な事件が起ったのであって、専制君主化して皇權を掌握していたならばけっして起らなかったはずであると考ええる。

ただ、これらの皇嗣をめぐる事件の実相が、称徳による陰謀であることがはっきりしている水上志計志麿事件をはじめ、淳仁廃帝・和氣王の両事件も含めて称徳から仕掛けられたものであり、これらの有力皇嗣を除外することによって称徳の皇權掌握がすすんでいったことは間違いない事実である。ゆえに称徳が専制君主であったから有力皇嗣を排除できたのではなく、即位しながらも皇權の掌握がすすまなかったからこそ陰謀を用いてまで排除しなければならなかったのだと理解すべきである。しかし、対立する皇嗣を排除したからといってその政權が安定したかというと、それはまた別問題であって、称徳の再三の命令を無視して公卿官人らはしかるべき皇太子を立てることを要望して、皇嗣をめぐる事件に終止符をうつことはできなかった。称徳が皇太子をおくことによって皇權が分立することを嫌ったことや寵愛するがゆえに僧侶である道鏡を大臣・禪師・太政大臣・禪師、そして法王に登用して政治に介入させたことなどを理由として、公卿官人らと乖離したことが政權に動揺をもたらしていたのである。

このような公卿官人ら中央貴族との乖離によって、それに代えて称徳は下級官人や地方豪族を重用して政權を構築しようとした。その方策の一つが祥瑞の献上を創出することであったといえよう。称徳は、単なる祥瑞ではなく、「白色」の鳥獸を進献させることによって、自身を天皇として冒すべからざる「聖性」「人神」なる存在、前掲の神護景雲元年八月癸巳条にみえる「聖の皇」（聖人の天皇）として意識させ、自己を正統化し、皇位を保持しようとした。こ

これらの事実は称徳が貴族官人らと乖離し、その掌握に苦慮して治政も動揺していたことの裏返しであり、その確証となるのである。

注

- (1) 中川收「称徳・道鏡政権の形成過程」(『日本歴史』一九六号掲載、一九六四年九月、のち『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九一年五月)。
- (2) 佐藤信『律令国家と天平文化』(吉川弘文館、二〇〇二年九月) 五〇～五一頁。
- (3) 瀧浪貞子『日本古代宮廷社会の研究』(思文閣出版、一九九一年十二月) 一一二頁。
- (4) 吉川真司『聖武天皇と仏都平城京』(講談社、二〇一一年一月) 二三四～二三五頁。
- (5) 木本好信「称徳・道鏡政権の実態」(『史聚』三九・四〇合併号掲載、二〇〇七年三月、のち『奈良時代の政争と皇位継承』所収、吉川弘文館、二〇一二年三月)。
- (6) 『続日本紀』天平宝字八年十月壬申条。
- (7) 佐藤注(2) 前掲書、五〇頁。
- (8) 北山茂夫「道鏡をめぐる諸問題」(『立命館法学』四・五合併号掲載、一九五三年九月、のち『日本古代政治史の研究』所収、岩波書店、一九五九年四月)。
- (9) 沢野直弥「称徳朝における皇嗣問題」(『史聚』三三号掲載、一九九九年一月)。
- (10) 中川收「天平神護元年における和氣王の謀叛」(『日本歴史』一七九号掲載、一九六三年四月、のち『奈良朝政治史の研究』所収、高科書店、一九九一年五月)。

称徳・道鏡政権の実態と皇位継承(木本)

- (11) 木本好信「淳仁廃帝の反攻試論」〔政治経済史学〕五九一号掲載、二〇一六年三月。
- (12) 直木孝次郎「万葉貴族と玉津島・和歌の浦」〔東アジアの古代文化〕六四号掲載、一九九〇年七月、のち『飛鳥奈良時代の考察』所収、高科書店、一九九六年四月。
- (13) 笹山晴生『奈良の都』（吉川弘文館、一九九二年四月）一四〇頁。
- (14) 中川注（1）前掲論文。
- (15) 直木孝次郎「淡路廢帝淳仁の死をめぐる」〔飛鳥奈良時代の考察』所収、高科書店、一九九六年四月。
- (16) 木本好信『続日本紀』天平神護元年十月甲申条をめぐる」〔日本歴史〕四九七号掲載、一九八九年十月。
- (17) 中川注（10）前掲論文。
- (18) 木本好信『藤原種継』（ミネルヴァ書房、二〇一五年一月）一四四頁。
- (19) 直木孝次郎「古代における皇胤伝説と天皇」〔奈良時代史の諸問題』所収、塙書房、一九八六年十一月。
- (20) 『続日本紀』和銅六年十一月乙丑条。
- (21) 木本好信「石上志斐弓という女性」〔奈良時代の藤原氏と諸豪族』所収、おうふう、二〇〇四年十二月。
- (22) 渡辺晃宏『平城京と木簡の世紀』（講談社、二〇〇一年二月）三二六頁。
- (23) 瀧浪貞子「孝謙天皇の皇統意識」〔日本古代宮廷社会の研究』所収、思文閣出版、一九九一年十一月。
- (24) 瀧浪貞子『奈良朝の政変と道鏡』（吉川弘文館、二〇一三年三月）一八三頁。
- (25) 瀧川政次郎「弓削道鏡」〔人物新日本史』上代編所収、明治書院、一九五三年六月。その他に北山注（8）前掲論文、平野邦雄『和気清麻呂』（吉川弘文館、一九六四年十二月）九五頁、河内祥輔『古代政治史における天皇制の論理』（吉川弘文館、一九八六年四月）一二〇頁、森田悌『王朝政治と在地社会』（吉川弘文館、二〇〇五年十二月）一一三頁、鷲森浩幸「道鏡」〔平

城京の落日』所収、清文堂出版、二〇〇五年十二月）などがある。

(26) 佐藤注(2) 前掲書、五一頁。

(27) 勝浦令子『孝謙・称徳天皇』(ミネルヴァ書房、二〇一四年十月) 二八二頁。

(28) 沢野注(9) 前掲論文。

(29) 『日本紀略』宝龜元年八月癸巳条。

(30) 青木和夫他『続日本紀』四(岩波書店、一九九五年六月) 二六三頁。

(31) 瀧浪注(24) 前掲書、一二〇頁。

(32) 木本注(5) 前掲論文。

(33) 中川注(1) 前掲論文。

(34) 尾畑光郎「称徳・道鏡政権形成過程についての覚書」(『日本社会史研究』七号掲載、一九六〇年一月)。

(35) 持田泰彦「称徳朝における大量叙位とその影響」(『古代王権と祭儀』所収、吉川弘文館、一九九〇年十二月)。

(36) 東野治之「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」(『日本歴史』二五九号掲載、一九六九年十二月)。

(37) 吉川真司「天皇と赤幡」(『万葉集研究』三〇集所収、塙書房、二〇〇九年九月)。

(38) 東野注(36) 前掲論文。

(39) 次田吉次「祥瑞災異考」(『専修史学』二三号掲載、一九九一年三月)。

(40) 宮田登『白のフォークロア』(平凡社、一九九四年七月) 三〇～三二頁。

(41) 東野注(36) 前掲論文。

(42) 福原栄太郎「祥瑞考」(『ヒストリア』六五号掲載、一九七四年六月)。

称徳・道鏡政権の実態と皇位継承(木本)

- (43) 茂木直人「地方における祥瑞の意義」(『日本古代の鄙と都』所収、岩田書院、二〇〇五年三月)。
- (44) 根本誠二『天平期の僧侶と天皇』(岩田書院、二〇〇三年十月) 一〇三頁。
- (45) 細井浩志「『続日本紀』の自然記事」(『古代史の天文異変と史書』所収、吉川弘文館、二〇〇七年九月)。
- (46) 栄原永遠男「称徳・道鏡政権の政権構想」(『追手門経済論集』二七卷一号掲載、一九九二年四月)。
- (47) 西別府元日「祥瑞出現と国司行政」(『日本歴史』五五六号掲載、一九九四年九月)。
- (48) 茂木注(43) 前掲論文。
- (49) 『続日本紀』宝龜二年七月辛丑条。

(きもと よしのぶ・前甲子園短期大学々々長)